内外交差点

霧のマチュピチュと偶然の連続
タクシー世界一周記<南米編②>

成川　史華氏　（扇交通社長）　第4／12回

ウユニ塩湖を後にした私は、再び長距離バスに揺られながらボリビアとペルーの国境を超え、チチカカ湖のほとりにある街へ。そこで一泊するつもりだったが、ホテルにチェックインして街を散策していても人に出会わない。なんとなく不気味な感じがしたので、ホテルの人に謝ってキャンセル。そのまま夜行バスに飛び乗り、クスコを目指した。バスに乗る直前に眺めたチチカカ湖に沈む夕陽は、心に刻まれるほどの美しさだった。

クスコに到着後、あらかじめ予約していた宿まではタクシーを使った。夜行バスで一緒になった他のバックパッカーと旅の話をしていると「まだ宿を予約していないし、同じところに行こうかな」と相乗りすることに。これは旅先でよくあることだ。クスコはアンデス山中にあり、かつてインカ帝国の首都だった街だ。街の構造は坂や階段にあふれ、車道から宿に至るまでにも長い石段を上る必要がある。タクシーの運転手は「たぶん、この辺！」と言いつつも、私たちが目的の宿に辿り着くまで階段の上で待ってくれていた。間違っていた場合、次のタクシーに出会うのは困難なのだろう。旅の中で優しいタクシー乗務員さんに出会うと心が温まる。

マチュピチュへの行き方は何種類もあって、電車で行き、温泉につかり、バスで入り口まで登るとても簡単なツアーもある。他にも、自転車で山を越えるツアーや、クスコから何日もかけて徒歩で向かうツアーなんかもある。そんな中でも道中も楽しみたいという気持ちと過酷ではないという手軽さを楽しみたい旅人には、線路沿いを歩いて麓の村を目指す「スタンド・バイ・ミーコース」が人気だ。南米の旅ではリサーチ力がカギなのだがウユニに夢中になってリサーチが不十分だった結果、自然とこのルートに流れついた。参加したツアーのバス車内から、自転車ツアーの集団を見かけて「うわぁ、あっちのが楽しそうだったなぁ」と後悔することになる。せっかく来たのだから特別な体験をしたいと思うのは旅人の性なのかな。

バスで山間部を進む途中、増水した川に行く手を阻まれた。日本ならツアーはここで中止になるだろう。最近では近畿で警報級の雨予報が出た時、山登りのツアーがキャンセルになったことが記憶に新しい。私は他の乗客たちと一緒に不安を抱えながら景色を眺めていたが、反対側からやって来た別のツアーバスとドライバー同士が川越しに大声でやり取りを始める。やがて「人だけなら渡れる」と判断され、山の湿気と雨が染み込むバックパックを担ぎ注意深く川を横断し、対岸のバスに乗り換えた。ようやくスタンド・バイ・ミーコースの出発点にたどり着いた時には、すでに夕方5時を回っていた。マチュピチュ村は城崎などの日本の温泉街とそっくりな作りらしく、作ったのも日本人なのではと囁かれている。実際、日本人技術者が街づくりに関わったという話.もあるらしい。散策を楽しみにしていたものの、到着が遅れたことで、結局はツアーの夕食をみんなで食べて寝るだけになってしまったのは残念だった。

翌朝、遺跡のゲートの女性は私のパスポートを確認すると流暢に日本語を話し始めたのでびっくりしたが、それだけ観光客として日本人も多いのだろう。こんなところでふるさとを感じるのは不思議な気分だった。もし、少しでも興味がおありならぜひ足が動くうちに行かれることをオススメする。どんどん崩れていると聞くマチュピチュ遺跡は圧巻の見応えだった。当時の人々の暮らしの痕跡がいたるところに残る遥かなる太古のロマン。それを横目に見ながら修復作業に黙々と従事する作業員。そして観光客の食べ物を狙って自由に歩き回るリャマたち。霧が濃く、事前に旅人から見せてもらったような絵葉書的な絶景こそ拝めなかったが、それでも十分すぎる迫力と雰囲気があった。少し不完全燃焼だったが、道中の苦労を共にした仲間と思い出になる写真が撮れたから良しとしよう。今にして思うと、「次はしっかり調べてから来なさい」というマチュピチュからの私へのメッセージだったのかもしれない。下山してから、向かいの山に登るツアーや、他のアクティビティの存在を知り、やはりリサーチは大事だな――と反省した。

マチュピチュを後にして、私はナスカの地上絵を見るためセスナに乗った。空から見る地上絵は、言葉にならないほどの迫力だった。その夜にレストランで偶然話した相手が、実はセスナのパイロットだったというのも、旅らしい偶然。彼が「内緒だよ」と言って公開されていない写真を見せてくれた。まるで誰かが落書きしたかのような地上絵。六甲山の山肌ほどの大きさで、人の手で描けるはずもないようなもの。本当に不思議だ。

南米の旅では、移動のたびに誰かと出会い、話し、時に助けられる。そうした偶然が連なり旅の記憶はより深まっていく。神秘的な世界を見るため、次の目的地に想いを馳せる。